12年ぶりに大学に戻ってみると

住　　明　正（地球物理学教室）

70年代初頭の激動の嵐の中，「知識の切り売りではなく，生きた学問を」と若さ故の啖呵を心で切り，意気込んで街に出たつもりが（街と云っても，情ないことに役所なのでしたが），此度，のうのうと大学に立ち戻ることになりました。

大学も官庁も一つであり，単なる配置換なのだから，それ程気負うことはない，という気持がする半面，やはり，「大学」という思いもあり，心がはやります。更に，何となく昔の想いが心をよぎり，落ち着かない気分です。好きで愛憎半ばした昔の女に，図らずも十年後に再会したような気分です。それでも，“おんりぃいえすたでい ′70” と云う論文が出版される様になった位で，十年という歳月は，重いものです。十年一昔とは本当に良く云ったものです。

この十年余の間に，社会も，大学も，そして自分自身も大きく変わったはずです。そこで，今回は，環境も変わり，心が fresh　のうちに，思いのたけを書いて，まずは御挨拶としたいと思います。

まず最初に思ったことは，「大企業のサラリーマン」から，社員６人位の「有限会社の部長に転職したんだなあ」という感じです。毀誉褒

貶はあるものの，気象庁は，従業員６千名余，支店・営業所網を全国に持つ「大企業」ですし，とに角，業務内容も決まっています。それに比べて，東大は，規模こそ大きいものの，独立商店が集まっている商工組合のようなものと云えます。古い暖簾を誇る老舗から，最近著るしく売り上げをのばしている新興のスーパーなどが寄合ってやっている様な感じに思えます。各店毎に，経営状態が異なるものですから，何事も決まるまでに時間がかかります。

このような環境の違いは，研究室・教室の中にも表われています。気象庁のような官庁組織では，そこの構成員は，職務内容は異なっても，外に対しては一つの組織の一員であり，思考の枠組も，価値観も，一定のものがあります（勿論，ドロップアウトする人もいることはいますが）。気象庁では，嘘とは云え，「日本の気象業務を支えていくのだ」という「信念」を持ちつづけてゆくことは，気象庁という村落共同体の中では可能ですし，「最後の農耕民族」としては，「義理と人情のしがらみ」の中に生きて，お金を稼いでいくのも，それ程，居心地の悪いものではありません。それに比べ，「大学は，学問の府」という「情念」は余りにも大きく，今の商工会議所的組織では担いきれないように思います。一面では，商品経済が浸透しながら，他方では，基本的には前世紀的な身分社会が残り，構成員相互の利害も一致せず，なかなかと奇妙なところの様です。

とに角，十年余の間，社会に出て身につけたことは，人間関係を，社会を「商売の視点」から視ることが，一番自然になったことです。それと，やはり「コスト意識」です。「親方日の丸」の官庁にいても，一応身につくのですから，企業にゆけばもっと身につくことでしょう。勿論，大学の先生でも，「商売に長けた人」もいるでしょうし，大学に残っていても，このような視点が身についたかもしれませんが。

二番目の印象は，全く個人的な事情かもしれませんが，気象庁での「青年将校」の立場から，「中間管理職」になったと云うことです。気象庁は，戦争終了後に，外地や，軍から大量の復員を吸収したため，この５年で，全構成員の⅓が退職するといういびつな組織でしたが，その変わり，我々「団塊の世代」は，ずっと「単純労働力」であったわけです。その分だけ，気ままな「労働者の生活」をしてきたわけで，この点に関しては，今の「モラトリアム人間」を非難することは出来ません。

大学に来ると，一応，責任ある立場なので，真面目に取り組んでゆかねばなりません。云いかえれば，やっと「中年の玄関口」に来たということでしょう。

三番目の印象は，教育についてです。すぐに思ったのは，「授業料が高い」ということです。アメリカの大気科学研究所の食堂で，ベル研から来ていた人と話した時，彼が，「アメリカでは，Ph．Dをとったら給料がぐっと高くなる。そうでなければ授業料に見合わない」と云った時，びっくりしましたが，日本でも，段々とその状況に近づいているように感じます。彼はひき続いて，「何故に，給料も高くならないのに，大学院に進学するのか？」と聞いて来ましたので，「真理のため，公共の福祉のため」と答えたら，「共産主義社会！」とびっくりしていました。冗談はともかく，大学院教育の矛盾がますます進行しているように思います。アメリカの様に，職業教育として大学院を位置づけるか（つまり，research という business を行う businessman を養成する），「大正教養主義に

みられるような全人教育」を目指すか，「職能集団としてのギルドの後継者養成機関」とするか，何らかの意志決定が必要の様に思いました。もっとも，このように悩んでいるところは，理学部ぐらいのものかもしれません。他学部では，とっくにカタがついているのかもしれません。

いろいろ書いてきましたが，「組織に属し，40代を前にしたしがらみ」も結構大変です。権力をめぐる「出世競争」もそれはそれで大変です。とにわけ，「冬の時代」といわれる最近は，企業なり官庁なりの組織でしのいでゆくのも，しんどい作業です。その意味では，大学の先生は，一応，独立自営業者で，自分の意欲と決断でやってゆける領域が広いという幻想があるだけ良いように思います。

「たどりついたらいつも土砂降り」── 僕が学生時代に好きだった唱の文句です。どこに行っても，安穏な土地はないというのが実感です。それでも，十年余，社会に出て生きて来て，たいがいの事に，「それがなんぼのもんや」と云える様になりました。

大学は，個人商店である以上，「物に動じない，自己の確立したしかも，経営センスのある」経営者になるべく，努力してゆきたいと思います。

（この文章を読まれる人の中には，“商売”の言葉に，不真面目と思われる方もあるかもしれません。学生の頃は，「人間としての実存をかけて，現代の諸課題と取り組む」等の空虚な言葉が好きだったのですが，社会に十年も居ると，“商売”の言葉で物事を語るのが，非常に自然に思えてきました。悪しからず。それが，一つの進歩と思って下さい。）

◉いつも泥棒がねらっている（盗難注意）！

本郷構内は泥棒天国といわれています。いたるところで泥棒（盗難）の被害にあっています。あなたのちょっとした注意で被害をくいとめられます。

～最近被害続出～